

## 随筆

# 各地の水辺を訪ねる－2

## ニンフェンブルグ城の水景

亀田 泰武\*

### 1. はじめに

お城はミュンヘン駅の西北西約4kmの所にあり、歴代のバイエルン選帝侯の夏の居城の一つであった。選帝侯はドイツ王の選挙権を持つ諸侯や大司教のことをいい、その数は年代につれ変わっていくが18世紀では大司教4名、諸侯5名で構成されていた。

もともとは小さな城館で、それを拡張していったため、中央本館が小さいのと城館を挟んで東西に長い運河があるのが特長である。ノイシュバンシュタイン城を作ったルートヴィッヒ2世もここで生まれた。

### 2. 歴史

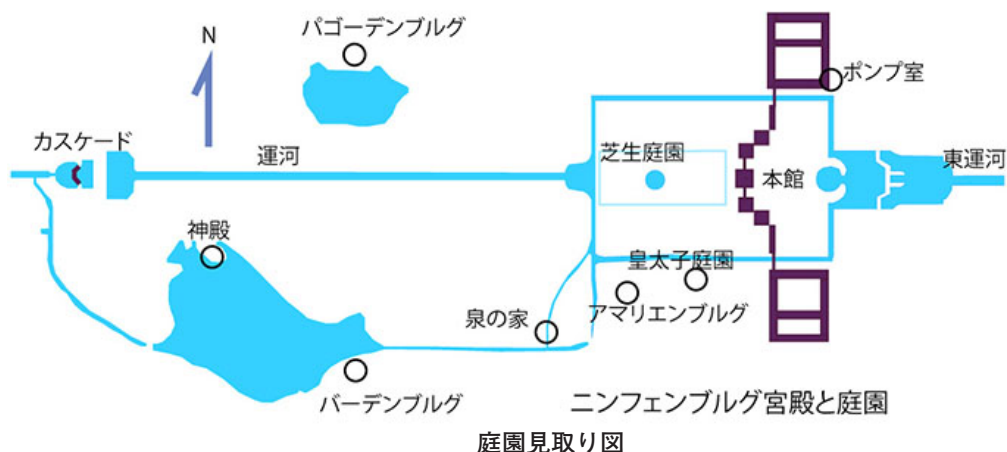
城館の建設を始めたのは選帝侯フェルディナンド・マリアの妻のアーデルハイトで、イタリア人アゴステイーノ・パレリが1664年に設計した。17世紀末時点では中央本館の立方体のような5階建ての建物とその西にある中央の噴水を4つの小さい噴水が取り囲む、幾何学的な庭園だけの比較的小規模な城館であった。

フェルディナンドの後を継いだ息子マクシミリアン

2世・エマヌエルは18世紀に入り、広大な宮殿に増築することとした。建築家のエンリコ・ズッカーリに設計させ、本館の両袖に正方形の3階建ての居住館を2棟ずつ増設し、廊下でつないだ。その南の旧うまやを改築し、北側にうまやの対となるオランジェリー（オレンジなどの温室）を建て、これで宮殿が現在の姿となった。またフランス式の広大な庭園をつくり、その中に当時流行していた中国風内装を取り込んだ喫茶用のパゴードンブルグ（1719年完成）と水浴用のバーデ



宮殿 東側から  
5つの正方形の建物がつながっている



庭園見取り図

\*KAMEDA Yasutake, (NPO)21世紀水倶楽部理事長  
URL <http://www.mizumirai.net/sitema/>



芝生庭園

宮殿テラスから。噴水の向こうに運河。この辺はフランス式庭園が残っている。右で林が切れて芝生がのぞいているのが、かつてのフランス庭園の斜め直線道路の名残。パゴードンブルグ前の池まで見通せるようになっていたはずが樹木が大きくなって見にくくなっている。

ンブルグ（1721年完成）を建てた。この時期にはほぼ現在の規模の宮殿となっている。

1726年に後を継いだカール・アルブレヒトは1742年よりドイツ皇帝になったが、宮殿東側池の周りに半円形の広場を作りその回りにいくつかの建物を配置し、このなかには陶磁器製造所や宮廷管理人の住居などがある。ニンフェンブルグ陶器工房の品質はセーブルに匹敵するほど高く、現在も製作は続いている。また芝生庭園の南にすばらしい内装を持つ狩猟用のアマリエンブルグを建てた。

1777年に選帝侯となったカール・テオドールは庭園を一般開放している。庭園をいじりたかったのか、宮廷造園家のフリードリッヒ・ルードヴィッヒ・フォン・シュケルを呼び寄せた。

1799年から選帝侯となったマックス1世はフリードリッヒ・シュケルに命じ英国式風景庭園として大改造をさせた。宮殿から西に伸びる芝生庭園、運河とカスケードは残されたが、運河の南北のフランス式幾何学庭園は大幅に改造され、今の形になった。

### 3. 庭園

広さは200haあるが、創建当初は小規模なイタリア式庭園であった。選帝侯マクシミリアン2世・エマヌエルは宮殿とともに庭園も大拡張することにし、ヴェルサイユ庭園を造営したル・ノートルの弟子であったドミニク・ジラルドを呼び寄せ、フランス式の大庭園の造営に当たさせた。

大きな水路がつくられ西方のヴリュム川から水を引



カスケード

スケールも大きい宮殿から相当離れているのが残念なところ。

き、運河の西端に作られた大きなカスケードに流す一方、園内の南を走る水路に導き、噴水の動力源とした。

中央本館の西側の芝生庭園の南北にはヴェルサイユ宮殿庭園のようなBosketという、生け垣で囲まれた区画（木立の区画）をいくつも作り、その中には遊技場や各種の噴水を設置した。また西の運河の南北には、パゴードンブルグ南の噴水池とバーデンブルグの手前の噴水池を中心とする、縦横斜めの4本の直線の園路を設けた。パゴードンブルグの前に7本の噴水を持つ十字を変形した幾何学形の池が描かれた絵が残っている。このように18世紀当時には多くの噴水があり、ヴェルサイユ宮殿のようであったと思われる。宮殿東には長い直線の運河が設置され、その突き当たりには小さな建物が建てられた。

庭園は、19世紀になってフリードリッヒ・ルードヴィッヒ・フォン・シュケルによって大幅に英国式に改造された。芝生庭園の南北にあった、噴水などを持つBosketの多くは取り払われ、パゴードンブルグとバーデンブルグの前にあった噴水を持つ幾何学模様の池も、自然風の大きな池につくりかえられた。フランス庭園が残っているのは、宮殿から見渡される芝生庭園、運河、カスケードなどだけである。

### 4. 運河

宮殿本館すぐ西に、中央に噴水を持つ幾何学的形状の芝生庭園があり、その西に幅20mほどの長い運河が延びている。この配置はヴェルサイユ庭園と似ている。一方、玄関となる、宮殿東側にも大きな池があり、そこから東に長い水路が延びていて、この水路は宮殿からの眺望のためのものと思われる。水路の先端にはお堂





宮殿の東

玄関前の広場と池の向こうに運河が続き遠くの建物まで見通せる

のような小さな建物がある。昔この水路の外側は畑のまま庭園になっていなかった。今は住宅地になっている。

このように宮殿から東西両方に長い運河が延びていて、こういう配置はほかにはない。

宮殿から東の運河の先まで1.9kmもあり、庭園の中心である西の運河より長い。宮殿西のテラスから西のカスケードまでは1.3kmである。カスケードに流れ込む水路は1.6kmほど西に伸びていてバシング・ニンフェンブルグ運河と呼ばれ、その先は暗渠になってずっと西のヴリュム川につながっている。

散策などに便利のように、ここでは長い運河の途中に橋が架かっている。西の運河では中程に歩行者用に金属製の、目立たない橋がある。東の運河は宮殿近くでトラムの通る道路橋が架かっていて、東端近くでももう一つ架かっている。これらの橋は宮殿からの眺望



運河から宮殿を見る

運河の両端は水面が広がっている。

を考えると邪魔なので、あとからの都合で架けたものであろう

## 5. カスケード

カスケードは宮殿建設に従事した建築家ヨセフ・エフナーが設計し、1717年に作られた。滝は2段で、3列ある。両端のカスケードは最初直線の堰を落ち、2段目は弧状に張り出した段を落ちるように、また中央部上段は円弧の外から中へ、下段は円弧の中から外に出るデザインになっている。後世になって彫像がいくつか設置された。

庭園としては大きなカスケードが見ものなのであるが、そこまで行くのに宮殿から歩くしかなく、片道15分くらいかかり、バックツアーではカスケードまで行くのは無理になってしまう。

カスケードの裏に回ると、ヴリュム川からの導水路が西に延びているのが見える。

## 6. 泉の家

ポンプ小屋は動力源となる水車の設置が可能な庭園南側の低い場所が選ばれ、1767年にFrancois poitevinが芝生庭園の大噴水用に木製のポンプと高架水槽を設置した。

1803年にJoseph Baaderがより強力で静かなポンプを設置し、これは現在でも動いている。運河の水は二つの水車に入る。小さい方の水車は直径4.7m、幅1.27mでこれがクランクシャフトを回す。クランクシャフトの連結棒は3本のシーソービームを上下させ、ビームの両端に2台のピストンがつながっていて、上下に動き、ピストンの合計6個のシリンダーが水を押上げる。施設のフレームは樫の木、ビームやロッドは鋳鉄、クランクシャフトは鍛鉄、ピストンやシリンダーは銅でつくられた。ピストンは、なめらかに上下し、かつ水密性を保つため皮で巻かれていた。また皮の柔軟性を保つために、小さなパイプで水を補給していた。

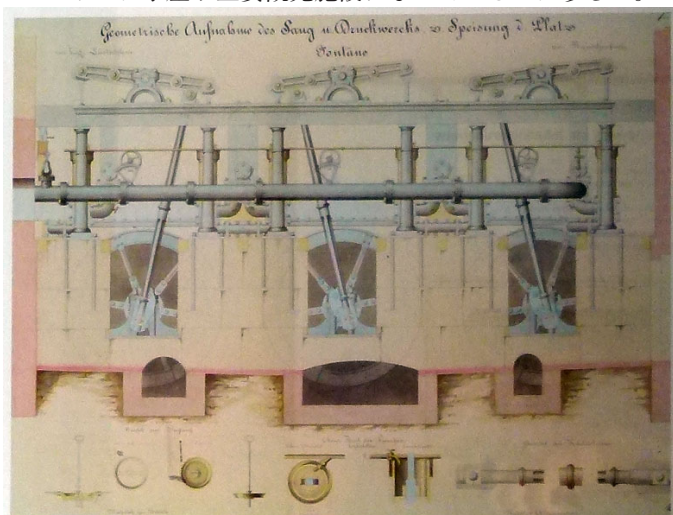
Baaderはポンプと外部への配管の途中に、空気室をおいて、水圧を一定に保つクッションとした。

大きな水車の方は直径5.3mで幅1.5m。2本のビームと4つのピストンを動かした。



泉の家

運河から水路が入ってきて建物の中の水車を回すようになっている。機械の回りには解説のパネルも。裏方のポンプ小屋が主要観光施設になっているのは珍しい。



Baaderのポンプ説明パネル

ヨハネスポンプ室にあった。下の3台の水車がロッドを上下させ上のビームがシーソーのように動いてピストンを上下させる。

このポンプシステムは1900年に水車が木製から金属製に変わったのを除き、現在も動いていて、欧州で最も古い機械の一つとして管理されている。

18世紀に動いていたポンプはバロックポンプと呼ばれ、その仕組みの絵が泉の家のパネルにあり、現代の3シリンダエンジンのような形であった。水車などによって回転するクランクシャフトが3つのピストンを上下させて水を押し上げるもの。その後作られたものは水車の回転力をロッドとビームによって複雑に伝えるものであり、バロックポンプの方がずっと簡単でコンパクトであるが、効率が悪かったのは材質や工作精度のためであったのであろう。

## 7. ヨハネスポンプ室

1808年Baaderはオランジェリーのある建物の一角に、宮殿玄関正面の噴水のためのポンプを設置した。3台の上流しの水車が6つのビームと12のピストンポンプを動かすもの。もともと水車やビームは木製であったが、1835年ポンプ主任であったフランツ・ヘスがピストンロッドを鍛鉄に、シリンダを銅に交換した。このポンプも現在残っていて建物の外から覗くことができる。



ヨハネスポンプ室

オランジェリー建物の右端にある。



ポンプ設備

ヨハネスポンプ室の設備。中央下に水車があり、左右のポンプを動かす

## 8. バーデンプルグ

水泳のための小宮殿としてエフナーが担当し1721年に完成。地下階には広い水浴場が設けられ、温水プールとなっていた。宮殿は北の運河の方向を向いている



が、かつては建物の南北に幾何学的な庭園があり、正面の池には噴水があった。



バーデンプルグ  
風景庭園に取り込まれている。

19世紀の庭園大改造により、建物の前は広い池が広がり、英国式風景庭園となっている。

建物のテラスから池を見渡すと対岸の西に神殿が見える。中にはアポロの像があり、庭園大改造に伴いフリードリッヒ・シュケルが設計した。



風景庭園と神殿

## 9. パゴーデンプルグ

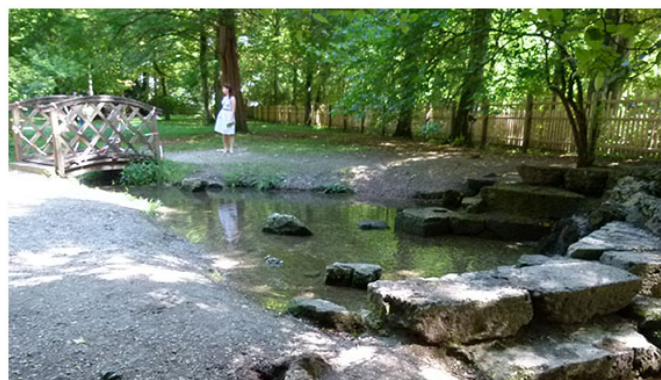
選帝侯の親族が気取らない喫茶などに集まる2階建ての小さな建物で、エフナーによる。広い池の北にぽつんとあり、平面は八角形で、そのうち4辺が飛び出した形になっている。東洋の塔のイメージであるが、外観は西洋風で2階は東洋風となっている。

正面にはかつて幾何学形の噴水のある池がありフラ

ンス庭園が広がっていたが、19世紀の大改造で、風景庭園の大きな池に改造された。

## 10. 皇太子庭園

1800年頃、少年であったルードウィッヒ1世のためにつくられたもので、こじんまりとした空間のなかに日本庭園のような小さなせせらぎや池がある。夏の家という小さな木造の建物もある。



皇太子庭園のせせらぎ

## 11. 終わりに

ニンフェンブルグ城は夏の宮殿の一つで、ほかに離宮が二つある。一方、ミュンヘン中心部に大きな宮殿があり、その庭園は小さい。

水景観を考えるに当たって、19世紀の英国式風景庭園への大改造がどうだったかがある。庭園の目を引きつける場所として、噴水、せせらぎ、彫像、花、紅葉、などの存在がけっこう重要な要素である。大改造の際残された噴水は少なく、また素晴らしいカスケードが遙か離れたところにあるので、庭園が地味になっている。これはこれでいいかもしれないが、風景庭園への改造は、もっと規模が小さくても良かったのではないと思われる。風景庭園になり、樹木が多くなっていて、紅葉がきれいだといいが。

一方、創建当初の比較的小さい宮殿本館を壊さないで、まわりにいくつもの建物を増設しているのが面白い。

噴水を支える、けっこう複雑な機構のポンプ設備が、性能を考えると現代の小型渦巻きポンプで代替できるのに、そのまま保存され、遺産となっているのはありがたい。機構が大がかりなので、重量感があって、見応えのあるものになっている。